

49 我が街、船橋を歩く 船橋の魅力 (20)

—戊辰戦争「市川・船橋戦争(1)」—

29期 仲田 元昭

今回から幕末・明治の歴史を振り返る街歩きです。鳥羽・伏見の戦いで始まった戊辰戦争、江戸無血開城後、南関東での最初の戦い「市川・船橋戦争」を2回にわたりご案内します。

1, 江戸無血開城後、最初の戦いの場が船橋

彰義隊による上野戦争より1カ月程早く、慶応4年(1868)閏4月3日、旧幕府兵(撤兵隊)と新政府兵の最初の戦いの場が船橋で「船橋の戦い」とも言われています。

木更津に脱出した旧幕府軍撤兵隊5大隊1,500人の一部、第2、第3大隊600人の兵は、新政府兵が市川、船橋に進出するとの報を受け、家康を祀る船橋大神宮に陣を構えました。

2, 戦いの経緯

「船橋北部(馬込)の戦いから市街戦へ」 「馬込、安立庵墓所の新政府兵の墓」

慶応4年(1868)閏4月3日(旧暦)、午前5時頃、八幡で戦いが始まりました。鎌ヶ谷にいた新政府軍宮崎の砂土原藩は、八幡へ援軍に行く途中、午前8時頃馬込(筆者の自宅近く)と夏見で待ち伏せしていた撤兵隊と戦いになり勝利したが、双方に死者が出ました。

砂土原藩は11時頃に船橋宿に突入り市街戦になりました。(市街戦の様子は次回に)

「船橋西部(海神)の戦い」

船橋宿での戦いの最中、行徳から来た新政府筑前兵と行徳道入口の海神三又路で待ち伏せしていた撤兵隊との間

で激しい銃撃戦になり、この戦いで新政府兵の小室弥四郎銃手は、撤兵隊第一大隊長の江原鑄三郎と格闘となり命を落としました。

江原鑄三郎は、格闘後に筑前兵に左腿を銃剣で刺され、間一髪のところを仲間に助けられ船橋・山野の民家に匿われました。江原は、そのお礼に「三つ葉葵の金箔の痕が残る紋章入りの銃弾入れ」を置いて行き、その後、江戸に戻り名を素六と変えて明治23年には帝国議会議員になり、同28年には麻布中学校を創立し、大正11年81歳で亡くなるまで麻布中の校長を務めました。

これが縁で、今でも江原の出身地沼津と船橋・山野とは交流が続いています。

(参考図書:平成27年「ふなばしお散歩マップ」、平成24年「葛飾風土記」他) 「50 我が街 船橋を歩く に続く」 「2024-12-1 寄稿」



「砂土原藩 常吉の墓(表面) 千葉県墓誌(横)」



「撤兵隊が置いて行った葵の御紋入りの銃弾入れ」